

藤沢 周 『ブエノスアイレス午前零時』論

— 自己再生の物語 —

A Study on "Zero O'clock A.M. in Buenos Aires", by Shyu Fujisawa.

宇野 憲 治

Kenji UNO

"Zero o'clock A.M. in Buenos Aires" refers to zero o'clock P.M. in Japan. While it is summer in Buenos Aires, it is winter in Japan. So, it makes a contrast with Japan in terms of both time and season. This story describes a hot spring resort in Japan in winter, but it is entitled "Zero O'clock A.M. in Buenos Aires". The reason for this mismatch is probably due to a problem caused by distinctive contrasts. Such problems as "reality and unreality", "secular and holy", "earth and space", "rural and urban", "material and mind", "disappointment and hope", "life and death", "death and resurrection", etc. is involved in this piece of work. Also, we can find metaphysical problems in these specific problems in life as well.

—

「ブエノスアイレス午前零時」は、雪と硫黄と、温泉卵のにおいから始まる。郷里にまた閉じこめられた青年がいる。閉塞は青年にとってすでに、索漠とした細事から成りながら、限りもない反復の悪夢の様相を呈している。そこへ温泉宿の、客も通らぬはずの廊下を、片側の壁に寄り

添うようにして、「女」が行く。出会いである。苦い諧謔をふくんで、筆の運びは辛抱強い。タンゴのポーズを取って、男の肋のあたりに老女の、乳房とも、ただのドレスの膨らみともつかぬものが、かすかに触れる。現在と遠方との、「交接」である。男と女が交互に、現在になり遠方になる。とある。この作品世界を見事に、また、象徴的に言い表しているように私

(古井 由吉「芥川賞選評の言葉」)

とある。この作品世界を見事に、また、象徴的に言い表しているように私

には思える。

さて、題名であるが、題名の「ブエノスアイレス午前零時」は、まことに奇妙な題名である。「ブエノスアイレス午前零時」というのは、一体どういう意味であろうか。ブエノスアイレスにおいて午前零時は日本時間では何時であろうか。

地球は「表面が鈍い鉛色の半熟卵」に似ているとある。卵の表面の一点を日本だとすると、中心を通って真反対の点がブエノスアイレスである。とすると、ブエノスアイレス午前零時は、日本においては午後零時であり、ブエノスアイレスが真夏とすれば、日本は真冬である。地球上においては日本とブエノスアイレスは、季節・時間等全ての点において逆になっているのである。日本を現実とすれば、ブエノスアイレスは非現実の世界と言ってもよいし、ブエノスアイレスを現実とすれば、日本は非現実の世界と言ってもよいのかもしれない。「ブエノスアイレス午前零時」とすることによって、現実・非現実の狭間を描出したと言ってもよい。

トンネルを抜けてバスが出てくる場面がある。そのトンネルの出口の所で主人公カザマは放尿している。「カザマは向かいの低い山を見ながら雪の中へ小便をした。ガードレールまで隠した雪はサクサクと音を立てて、自分の小便を吸い込んでいく。細くて深い、鋭い穴が雪の中を開く。」とある。トンネルは水平に空間を移動する通路である。雪の上に放尿するその軌跡は、地球の中心に向かって鋭い縦の穴を作っている。横に開けられたトンネル、縦に開けられた放尿による穴。この縦と横の空洞は、いわば、時空を繋ぐものの象徴と言ってもよい。宇宙の科学用語でタイムスリップとかタイムトンネルとかワープとかいう言葉がよく使われるが、この場面には

それらを連想させるものがある。このトンネルとその前での放尿の場面は縦横の時空を越える象徴として描写されているように思われる。題名の「ブエノスアイレス午前零時」と深く拘わっている箇所である。

二

一〇キロしか違わないのに片や若者たちが集まるスキー場、片や老人たちが集まるホテルのダンスホール、雪の上の白銀の世界、雪に覆われたホテルのダンスホール。表の華やかな世界と籠った裏の世界が対照的に描かれている。

広告代理店をしていたカザマがUターンをして帰るのは、そんな世界である。職を失って故郷に帰るといふのは現代社会を象徴している。リストラにあたり、都会の生活が厭になったり、フリーターとしての生き方であったりである。ただ、ここでのカザマの失職理由は違っている。

クマノミとインギンチャクというありふれた映像につける音楽を、セゴビアのギターにするとといった課長を大笑いして、口論になった。

とあるように、他愛もないことで上司と口論し、それによって「キレ」たことが原因である。帰郷しては見たものの、カザマの心が晴れるわけではない。冒頭付近には、そんな主人公の心情が象徴的に描かれている。主人公が身につけている服は「土木作業員が着ているのと同じ地味な紺色のアノラック」であり、またその作業着には黄色の刺繍が小さく入っている。「紺色の中に小さな黄色」、この服装によって主人公の心情がよく表わされている。黄色は希望とか光を意味し、紺色は沈鬱で憂鬱な色であるとする。主人公の心情は、沈鬱な現実の中に一抹の希望と光を求めていること

になる。また、この黄色は後述する女主人公ミッコにも通ずる色である。

田舎の温泉街での生活で、カザマは日を追うにつれ硫黄臭くなっていく。そにつれてカザマは一種の諦めの状況に陥ってくる。しかし、一方では、諦め切ることができず、ここからの脱出を夢見ている。硫黄の臭いが染みついてくるように現実と葛藤し悶えている主人公の苦悩がある。父親に豆腐屋の跡を継いで欲しいと言われながらも継ごうとしない自分、かといって都会に帰ることができるわけでもない。なまじっか都会に帰りたいたいという一抹の希望があるだけに、今の自分に苛立っている。

竹村はそんなカザマの顔を「桔梗の間、の顔」という。「十五年も前に、旧館の桔梗の間で手首を切って死んだ銀行員の顔にしているのだそうだ」とある。孤独で憂鬱なカザマではあるが、一生懸命生きようとしている。そのカザマの顔には死相が見取れるというのだ。生きようとしているカザマに対し、カザマの顔に死相を見る友人、この対比も興味ある描き方である。

そのようなカザマが見たり聞いたりしている現実に次のようなものがある。「客の朝食にいつも半熟の温泉卵を出す」のが、カザマのここでの日課である。カザマは、卵を茹でている温泉の中から網を上げるのであるが、「源泉がゴボゴボ噴き出している音を聞くたびに、カザマは死んだ祖父が口にはめていた人工呼吸器の音を思い出したものだ、もうそれすら慣れてしまった」と、同じゴボゴボというひとつの音を聞くにしても、生と死ということをすぐに考えてしまう。

また、温泉の硫酸塩で赤く色の変わったふるい湯音メーターを確かめるたびに、カザマは昔美家にあつた簡易血圧計の丸いメーターのことを考える。

そのときの精密機械独特の繊細な針の動きが、幼いころのカザマには、体だけではなくて、地球や宇宙までもメーターの数字に出てくるのではないかと想えて、やたらその血圧計を持ち出しては、木や取り付けられただけのガードレールや山で捕まえたウサギの背中にベルトを押し付けてポンプを揉んだ。

とあるように、血圧計は、全てのものの「いのち」と「宇宙」を連想させるものとして出てくる。本来、血圧計は、父親が病気のとき血圧を計る器具であったが、カザマはその血圧計を木に当てたり石に当てたりして、木とか石の脈を計ったりしようとしている。父親の身体を計るものであるにも拘わらず、彼は自然の鼓動を父の血圧計によって計ってみようとしたのである。もし自然の全てのものを計ることが可能であるなら、彼は自然の鼓動を計ろうとしたのではあるまいか。そのような描写が出てくる。受賞者の言葉として「言語以前に横たわる剥き身の世界になる一歩手前の世界の存在に耳をすまそうと心がけている」とあるが、これに通ずる箇所であろうか。

銀座方面へと続く道路が見えた。よくある坂道だ。渋滞するタクシートの赤いテールランプの連続とショーウィンドウの照明の道を歩いていて、右の路地に入り、さらに奥の細い路地に入る。銀座とは思えないような暗い路地で、古くて小さな飲み屋の看板をいくつか見ている自分がある。そこにいる自分が、故郷にUターンして雪深い旅館の従業員としてダンスホールに立っているのを想像しているのではないかとさえ思った。

という箇所がある。カザマがダンスホールに立って過去を回想している場面であるが、彼はふと銀座の路地裏にいながら今いるダンスホールに立っ

ているのではないかとの錯覚に陥っている。銀座の細い路地に立っているのが現実なのか、ダンスホールに立っているのが現実なのか、ふと時空を越えてしまうのである。

また、カザマが湯温メーターを見ようとする際、ふと思ひ浮かべるのは、「広告代理店の別棟にあったスタジオの、映像室の音響レベルメーター」である。「その赤と緑の光のビルがせわしなく動いていたのが、ちらりと頭の中に蘇ったが、本当に頭の奥の、幼児のころの記憶と変わらなくなってしまう」とある。今見ているポイラー室の古い湯温メーター、そのメーターを見ることにより、都会での記憶・幼児の記憶が蘇ってくるのである。幼児期のアナログ的なメーター、都会でのデジタル的なメーター、それらによつて宇宙を、自然を、音を、数値として認識している。目の前にある小さな物を通して過去に繋がったり、死を連想したり、あるいは天上的宇宙へ繋がっていくのである。このようなカザマの思考が多くの場合に描写されている。

竹村（みのやホテル支配人）は、カザマにダンス服を「松原ドライ」まで取りに行くよう依頼する。「グレーのワゴン」に乗り込んだカザマが、ラジオをつけると、現金輸送車強盗のニュースである。

フロントガラスに当たる雪は放射状にホップするように弧を描いて、次々と向かってきては逃げる。その動きだけを追っていると、目の前に続く黒く濡れたアスファルト道路がゆっくりと横に動いていって、脇の雪の壁にクルマを擦りそうにもなる。

何しようが、どうにもならぬ。

カザマはウインドウを開けて煙草を投げ捨て、ラジオのチャンネルに

手を伸ばす。

いくつかのボタンを押しても、雑音が入ってよく聞き取れない。山間の町に届く電波は、どの時間帯でもさっきのニュースをやっている局だけだ。

とある。聞きたくない現金輸送車強盗のラジオの内容、いくら他のチャンネルを換えようと思つてもこの局しか出ない現実、また、雪がフロントガラスに当たつてクルマの運転もおぼつかない状況、この場面には、主人公の不安定ならだつ心理的状态と自己逼塞感が象徴的に描き出されている。

三

宇宙を集約するとすれば、ひとつの卵といつてもよい。雪に閉ざされたホテルのダンスホールもまたそれに似ている。一方ではまた人生の縮図といつてもよい。二時間余りのダンスパーティー、そこで重要なのはミュージックセレクトである。「ルビー・マレイとタンゴ・エルチョクロ、それからグラン・プレミオ4と、ああ、これは基本ですなえ、ほれ、雅・グレイスフル・ダンシング。これらは最低限、用意しておかないといけませんねえ……」というように曲の順番が命なのである。また、一曲のダンスを踊るにしても足のステップが生命であり、一歩でも間違つた瞬間、その曲は命を失ってしまうのである。そのような意味からして、ミュージックセレクトとダンスのステップは人生の縮図と言つてもよい。このことは、結婚式、葬式、卒業式、成人式等の儀式についても言えることで、一歩でも間違つたとその式典は意味を失ってしまうのである。世間の常識ではそのように考えられている。そしてそこに人生の縮図が同様に見られる。

宇宙を徐々に小さくして考えた場合、銀河系、太陽系、地球、卵、原子ということになる。また人生について考えた場合、百年、五十年、十年、一年、一ヶ月、一日、一時、一分、一秒というように、それぞれの縮図として、また拡大としての役割を担っていることになる。巨視的なものから微視的なものへ、微視的なものから巨視的なものへ、マクロとミクロ、それらが入れ子型のように何重にもなっている。光と闇、表と裏、明と暗、生と死、それら対立するものが白い煙のように渾然一体となってこの作品を成立させているのである。また、ピアスの穴が象徴するように、過去と現在を一点に重ねたりする。この作品の特色として、二元的に見えながら最終的には一元的世界に帰結している。このような描き方は西洋的に見えるが、実際は東洋的認識の上に立った描き方なのである。

四

バスの曇った窓に団体客の顔がぼけて映って、最後部の窓ガラスにサングラスをかけた若い女の顔が一瞬覗いた。

とある。普通、若い女性はスキー場に行ってしまう。来るはずのない若い女性が乗っているとカザマは瞬間思うのである。また、宿に帰り鏡を見てみると、一瞬、サングラスをかけた女の顔がよぎる。

目の前の鏡が湯気で曇って、カザマは掌で擦る。と、濡れて歪んだ自分の顔の後ろで、何か影が動くのが見えた。目の錯覚かと焦点を鏡の奥に合わせると、サングラスをかけた女の顔がゆっくり通っていく。松原ドライに向かう途中で見かけた、バスの中にいた女だ。

カザマは蛇口を締めて、振り返った。だが、ボイラー室の入口のむこ

うには誰もいなかった。入り口まで行って、廊下を覗く。

廊下の壁に寄るようにして歩く、薄紫色のニットスーツを着た女の後ろ姿が見えた。だが、何かがブレるのをカザマは感じた。それまでの廊下の空気がまったく色を変えたようにも思える。いや、廊下を歩くサングラスの若い女という自分の想像の尻尾が、何処か小さな穴の中に吸い込まれるように消えた感じだ。

と、描写されている。はっとするような女性の登場のさせかたである。そしてよく見ると、その女性は、若い女の顔ではなく六五、いや七〇歳かもしれないくらいのお女なのである。そのお女の耳に、カザマは小さなピアスの穴を発見する。

カザマの同僚として吉村という若い女性が登場するが、その吉村にはピアスの跡がある。今はピアスはつけてない。それは、今ホテルの従業員となっているのでピアスをつけてはいけなからである。ミツコにもそのピアスの跡がある。年の若い吉村と年とっているミツコの耳に残るピアスの跡、その一点で二人を重ねることにより、吉村とミツコを二重写しにしている。若い者にとって、ピアスの跡というのは別に問題ではないだろうが、ミツコの耳に残るピアスの跡は当時としては大変ハイカラで珍しかったに違いない。カザマがピアスの跡に注意を向ける箇所は本文中に三箇所ある。単に三回使用されているのではなく、読者に注意を促すための繰り返しである。現在、若い者は男女を問わず普通にピアスをしている。カザマは、時間を越えた女というものをミツコのピアスの跡に見ているのである。全体的に見て、過去と現在が錯綜しているような箇所が多くあるが、この場面もその一つである。ミツコは年をとっていても若さの名残があり、そ

れは死に直面している老人の一抹の生の輝きに似ている。

風間の視点として、明るい中にいて暗いものに目が向くという視点をもっている。籠っているカザマにとつてなにか開くものを求めている。その開くものが、この場合、ミツコの存在、ミツコとの出会いということになる。

ミツコを表現するのに「場末で殺される天使」という言葉を何度か用いている。この言葉から連想するに、芥川龍之介の「南京の基督」を彷彿とさせる。世間の人々は、娼婦に対しては大変な偏見を持っており、不道徳で汚れた無知な存在と見ている。しかし、芥川はその娼婦を、すべての社会の苦を担い、悩める男性を救うキリスト的存在として描いている。このことは、ミツコにも言えることで、ミツコ自身「横浜で娼婦をしていた」という噂がある。事実かどうかはこの作品中では確認できないが、そのことを思わせる言動がある。例えば、耳についているピアスの跡、無意識に踊るタンゴを始めとする様々なダンスに、それらの一端が伺える。

名称について考えてみる。「みのやホテル」という名前のホテルが出てくる。何でもない名称のホテルに思われるが、「みのや」という字にどのような漢字を当てるかは別として、「みのや」から連想するイメージは糞虫のような殻の中に閉じこもってしまう籠りのイメージである。また、人名の「カザマ」は風の間という語を連想させ、風の通り道が連想される。自由ではあるが、どこか空虚で空しいという感じが残る。自由であまり偏見もない一方、鬱屈しており孤独である。「ミツコ」は光を意味する。盲目であるミツコは光のない世界に光をもっている人物として描かれている。カザマに光をもたらすのがミツコである。そのような意味で芥川の描く「南京の基督」の娼婦の存在に近い。カザマにとってミツコは光を与えてくれる存在

である。オーバーに言うならばカザマにとってミツコは基督に近い存在である。ミツコは非難されるのしられてもあまりこだわっていない。それは、一種の記憶喪失(ぼけ)に近いのであろうが、そのことによって周りに光を投げかけている。いわば、汚れた過去を持ち、盲目であり、他人からは非難されているにも拘わらず明るく生きている。そのような役割がミツコに与えられている。

ミツコは、大変清らかな面と大変俗的な面を二重合わせにもっている。ミツコは世間的に見て汚れた過去をもっているらしいにも拘わらず、この作品の中では、一番純粋な汚れない心の持ち主として描かれている。

「俺は、あんた、サルビア会も、人を選べといつとるんだよ。あんた、あれ、本牧の港のさ、ほれ、専属のパンパンだったという話じゃないか。」
「外人相手のお座布団屋だな」

と誰かが噂するように、ミツコに関しては定かではないが、汚れた過去の話が幾つかある。汚れた過去をもっているらしいにも拘わらず、昇華された心の美しさをもっている。閉じこめられた世界において埠頭の明かりをカザマが連想している。それは、暗い中に一抹の光を見ようとしているカザマにとって、ミツコは埠頭の明かりの存在に思えたのではなからうか。

ぽっかりと口を開けた穴の中から勢いよく湯煙が立ち上ってきて、カザマは思い切り息を吹き付けた。湧き出た湯の泡がもんどり打っている。雪に埋まっていたザルを探り、乱暴にその中に突っ込んだ。

ミツコの皺ばんだ手や顔やサングラスが脳裏を掠め、その向こうは外の雪で曇ったホールの窓ガラスだったはずだが、不思議とそこに見えるのは夜の埠頭の明かりだ。しかも何処か外国の客船まで見える。ワイン

かウイスキーの広告ポスターにありがちな構図しか思いつかない自分に、ため息を漏らした。もうこの土地から出られないほど、俺の頭は鈍化したんだろうとかザマは思う。別にそれでも構わない。

横浜で娼婦をやっていた婆さんかよ、と一人ごちながら、…(下略)…とある。この横浜の埠頭で娼婦をやっていたのがミツコである。そのミツコの若かった頃の性的な臭いをカザマは夢想している。明るいダンスホールにいながら暗い世界を連想する。普通の人であれば明るく騒いでいるときには暗い心情はあまり起こらないが、カザマの場合は違う。カザマはミツコの暗い過去の臭いを感覚的に嗅ぎつけているのかもしれない。

ミツコは記憶が曖昧であるため(ぼけているため?)過去と現実から離れている存在として描かれている。一方、カザマは現実を見ているにも拘わらず、過去にも現在にも身の置き所のない不安定な存在として描かれている。考えてみるに、人がぼけるとはどういうことであろうか。今、自分はここに存在している。在るのは現在であり、過去も未来もない。自分とつての今でしかない。過去・未来を感じることは、脳に蓄えられた記憶であり、それを活用して思い描く未来である。過去は記憶にしか過ぎず、未来はその記憶を基にした幻想にしか過ぎない。過去も未来も幻想という点からすれば同じである。どちらも在るように見えて現実には存在しないのである。過去を感じることは言葉とか写真とか臭い等によって記憶を蘇らせ、あたかも現実在るかのように感じたり認識したりするに過ぎないのである。記憶を蘇らせ、あたかも現実在るかのよう過去・現在・未来を感じることができなくなった状態が「ぼける」ということではないだろうか。

カザマは単調な日常生活の中にある。そのような中でミツコを含む都会からの団体客を迎えたわけである。一見若く見えるミツコ(実は記憶の不確かな老人である)を迎えたとき、一瞬心がときめく。ミツコに関する噂を聞くにつれ、カザマは嫌悪的感情を抱くようになる。それにも拘わらず、パーティーが始まると卵を持って行ってあげたり、ミツコの言動に注意関心を向けたりするのである。ミツコはバイタなどと言われながらも、本人もそれらの噂を知っているであろう(?)にも拘わらず全く気にする様子はなく、自分の今の現状を認め、何もなかったかのように行動している。ミツコ自身、今を生きようように感じられる。そういうミツコにカザマは次第に寄り添うようになる。

五

ミツコの描き方は一般常識的な生き方をした人物ではなく、百人に一人のような人物として、世間の常識からはみ出た人物として描かれている。しかし、このミツコの生き方こそが本質的な生き方であり、他の多くの俗的な人々のあり方と大きく相違している。

ナフタリンとポマードのような化粧品の匂い、「まるでスワッピングパーティー」、「手入れされた犬の品評会」、「仮想パーティー」等の俗世間の刺激が、閉ざされたホテルのダンスホールにひしめいているのである。そのような世界にあつて、一人ぼつんと離れたミツコ、二重三重に、ミツコの俗世間と離れた姿が描き出されている。

ミツコは電報をサン・ニコラスに打ちたいと言うのである。常識では考えられない行動である。それも、地名なのか、名前なのか分からない。と

にかくサン・ニコラスに電報を打ちたいと言う。何度も何度も言う。ミッコにとつてサン・ニコラスは若いころ何らか関係のあった地名か名前なのであろう。プエノスアイレスに電報を打って欲しいと言ったりする。過去にそれに拘わる何かがあったのではあろうが、現在では全く無縁の世界に生きていく。無縁の世界に生きていくだけにミッコの取る言動は周りの人から見ると不可解な言動に見えてしまう。ミッコの過去と現在が、ミッコの中だけで無意識に繋がっている証拠でもあろう。それ故に過去の世界は昇華され、現実の純粹さを逆に保つことになり得ているのかもしれない。ミッコの妹のヨシコはそんな姉の言動を取り合わない。しかし、無碍に否定するのではなく優しく見守っている態度である。ヨシコは名前のとおり、優しい女性として描かれている。身内であるということもあろうが、盲目で多少記憶を喪失している姉に対し大変優しく接している。ミッコをけなし貶める周囲の現実にあつて、妹ヨシコの優しさは救いである。そのヨシコの優しさに支えられてミッコは生きる力をもち、何とか現在を生き生きと生きている。

多くの人々は過去を引きずりながら、時間的位置づけをしながら生きていくために、かえって純粹になることができず、現在を生きている。人は年をとるにつれ近い過去の記憶は薄れ、若い頃の記憶が強く残るといふ。ミッコが電報を打とうとする行為の中には、ミッコの若いときの記憶が確かにあり、それは周囲の人にも知らないし、ミッコ自身も忘れてしまっているような無意識の行動なのかもしれない。しかし、その行為の背後には、ミッコ自身のそれに関係する何らかの過去があつたに違いない。ミッコの心の中には他に知ることのできない何か、タンゴを踊ることによって蘇っ

てきたのであろう。そのタンゴはアルゼンチンのプエノスアイレスと深く繋がっているであろう。過去と現在が脳裏の中で繋がっていない場合、何らかの現実的な臭いとか言葉とか動作等の刺激によって過去が幻影として呼び覚まされてくる。

例えば、ミッコにとってタバコというものがある。タバコを吸う際のマツチの記憶とミッコの何かが繋がるものがある。カザマの体臭となつた温泉卵の硫黄の臭い、この硫黄の臭いはマツチの硫黄の臭いと繋がりが、ミッコの記憶の一部を呼び覚ますのである。タンゴを踊るのもプエノスアイレスに電報を打って欲しいというのもその点からきていると思われる。温泉卵から始まって、硫黄の臭い、ポマードの臭いというように臭いが全体の中で重要な役割を担っている。使用されている品物についても、ポマードとジェルやムース、仁丹とクロレッツのガム、ナフタリンと樟脳というように臭うものにおいても古い物と新しい物をはっきりと区分して描いている。また、臭覚だけでなく視覚、聴覚、味覚、触覚と五感に訴える表現も多い。それらが上手く組み合わされ重層的な効果をあげている。ミッコがダンスを踊る時、風間が温泉卵をミッコに渡すが、ミッコはそれを何かプロポーズされたか勘違いした動作をする。その動作を見て、風間自身、電気が走るのを感じる。

次に、ミッコが行方不明になつて男性の風呂に入っている場面がある。ほけてそなたつたのか、潜在的に男性への関心がそうさせたのか分からないが、それは周囲の人々の響きを買う行為である。ミッコの性に対する何らかの臭いが感じられる。そのようなミッコは周りの騒動をよそに平然とした態度でいる。

ミツコが温泉卵を欲しがる場面がある。その温泉卵によって一夜目のダンスパーティーは台無しになる。落とした卵を他の人が踏み、その踏んだ人のダンスシューズが駄目になってしまふのである。ミツコは周囲の者から非難され、退場してしまふ。皆は、ミツコとヨシコは次の夜、ダンスに参加しないと予想し、吉村とカザマはそのことで賭けをする。多くの者が

ミツコ不参加に賭けるが、カザマ一人はミツコ参加の方に賭ける。しかし実際、次の夜ダンスパーティーが開かれると、ミツコは何もなかったように平然と現れる。俗的な見方をすれば、ミツコは当然不参加のはずであるが、ミツコは現実を超えた記憶喪失ということにより、俗にまみれない純粋性を保つことができていたのである。俗に汚されない純粋さというものをミツコは持つている。それは痴呆症にかかっているということからきているのではあろうが、痴呆症にかかることによつてかえつて純粋性が保たれているのである。現実生きている我々は、あまりにも周囲のものに把われ、現実を純粋に生きることができなくなっている。周囲のことにあまりにも惑わされ、自分自身を無くしている。自分自身こう生きたいと思うのに、生きられない自分がいる。結局は周囲の噂を恐れ、自分の言動をその中に封じ込めてしまふ。一方、ミツコは、昔、記憶が正常であるときは周囲の噂も気になつたであろうが、記憶を喪失している今、ミツコは精神的に自由なのである。ミツコは若いときは、自分のしたくないことも無理やりさせられたに違いない。しかし、人生を積み重ねていくことも無理や諦めにも似た諦観に達したのではなからうか。忘れようとした過去、その忘れようとした記憶がミツコに過去を喪失させているのではなからうか。ミツコは一見記憶喪失にかかっているように思われるが、本文中には正常な

部分もあり、本当に記憶を喪失しているのか、その振りをしているのか分らない部分もある。いわば、現実と非現実を一身に背負つて生きている女性なのかもしれない。

六

結論を言えば、ミツコのみがこの作品の中で唯一自分を生きている人物であると思われる。多くの人は、自分を生きようと思ひながら自分を殺している。けばけばしく俗臭を振りまきながら自分を生きているつもりが結局は自分を生きていない、それが現実である。心の純粋さで生きているのがミツコであり、表面のけばけばしさで生きているのが周囲の俗人たちである。ミツコの純粋さは痴呆症が進んだから保っているものかもしれないが、まさに天使のような存在である。主人公の私も、最初、ミツコの手を取ることは嫌ではあつたが、一旦手を取ると何か電気の走つたようなエネルギーに引かれ、純粋な何かを感じ、若さが蘇ってくるのである。そして、タンゴを踊ることにより、次第に、老人と踊っているのか若い女性と踊っているのか区別がつかなくなり、ある錯覚に陥るのである。それは、カザマの精神の蘇りであるのかもしれない。ミツコ自身もタンゴを踊ることにより五十年の歳月を一気に飛び越えたのかもしれない。それは、カザマの蘇りであると同時にミツコの蘇りでもある。ダンスの曲はタンゴからブルースに変わつているにも拘らず、カザマとミツコだけはそのままタンゴを踊り続けている。カザマは曲が変わつていることを知つているが、ミツコのリズムに合わせそのまま踊り続けるのである。

カザマはホールで踊る者達に視線をやる。トクが目大きく開いて、口

笛を吹くように唇を丸めているのが見えた。だが、ターンをするたびに、カザマとミツコにカップル達が目が止まるのが分かる。壁際で、アルコールを呑んでいたたり、休憩をしている者達も、奇妙な目つきをして、視線を注いでいた。まるで異国の人間を見るようにだ。

「大丈夫です…… 誰も見ていないです」

ブエノスアイレスは雪がさらに激しくなる。

最後にカザマとミツコがタンゴを踊る場面では、年齢の差を越えて男と女の関係を暗示させるような描き方になっている。そこでカザマが踊りながら回想するミツコは、若く美しい女である。カザマのミツコに対する心配りはミツコにとっては現実には受ける慰めの言葉以上にミツコに安らぎを与えているように思われる。カザマはミツコによって蘇り、ミツコは一時的にはあるがカザマによって蘇っている。カザマは、ミツコの美しさや若さを空想の中に描いて、そこに男と女を描き出そうとしている。ここに描き出されたカザマとミツコの二人の関係は男女の人生の縮図のようなものであり、一つの宿命的なものである。この作品はこのような宿命的なものを描き出そうとしているのではないか。

周りを雪が囲い降り積もる雪が全てを隠してしまう。カザマとミツコの心の成り行きを、しんしんと降り積もる雪が全て覆い隠していくというような幻想的效果でもって描出している。ここで雪は二重の意味を持つている。柔らかい雪と硬い雪、「カザマは積もっていた柔らかい雪を掬い取って、口に入れた。鼻の奥を刺されるような痛みとともに、上空何千メートルの空気のおいがするのを感じ」るのである。地上と天上、俗と聖、雪は地上にあって天上的な清らかなものを暗示している。差別されたミツコの、地

上での心の苦しみとミツコ自身の汚れない清らかさ、そのようなものが暗示的に表現されている。俗世間にあつて、光るミツコ、記憶が不確かなだけにこの世ならぬ清浄さを感じる。この世にあつて、俗世間にまみれないミツコの現在と重なっている。

ミツコは年をとつていても若さの名残があり、それはちょうど雪に閉じこめられた世界の中の一抔の光である。籠もりの中の蘇りといつてもよい。このことで連想されるのは森敦の「月山」という作品である。雪に閉ざされた冬の世界を通過して春へ、それはとりもなおさず、死と再生の物語である。この作品においては、雪に閉ざされた世界においてダンスを踊ることにより、カザマもミツコも蘇る。まさに月山の世界に通じる世界である。冬の真つ直中において、ダンスを踊ることにより、ブエノスアイレスの世界を連想する。南米のブエノスアイレスは真夏である。また、冬の真つ直中にありながら情熱というものがある。他の人たちのようにポマードの臭いとか、けばけばしい衣装ではなくて、ミツコの衣装は白とブルーの極めて清楚なものである。目の見えないミツコの目はスカイブルーであり、スカイブルーの色は宇宙そのものの色を意味すると思われる。宇宙は暗黒ではなく、暗い中に仄かな光がある。そしてその色がここで描かれているスカイブルーに近いである。

「温泉の源泉から上がる湯煙がひどくて煙草の煙なのかどうかも分からない」という箇所がある。タバコは人間に害を与えるものであるが、吸った煙は白い。一方、温泉から上がる湯煙は生を意味し、タバコの煙同様白色である。湯煙もタバコの煙も同様白くて区別はつかないが、本質的には生と死を象徴する真反対の煙なのである。一見区別できない湯気と煙草の煙、

両者は根本的には大きく違う。

ホテルをすっぱり覆っている雪、その降る情景を「雪が絹のドレスのように振えた」、それからまた周りを覆っている雪を「石灰岩の壁」のように表現している。このように、雪一つをとってみても、柔らかさと堅さ、生と死の二重の意味を付与している。雪に閉ざされた世界を死の世界とすればその下のホテルのダンスホールで踊るダンスは生の世界である。雪に閉ざされたホテルの午前零時の老人たちのダンスを死の舞踏会とすれば、ブエノスアイレス午前零時は生の世界である。同じように見える一つの世界であるにも関わらず、見方を変えるとき、ブエノスアイレス午前零時の世界は、死と再生の二重の意味を明確に帯びてくる。

〈キーワード〉

いのち・宇宙・聖と俗・純粹・死と再生

宇野 憲治 (コミュニケーション学科)

(二〇〇三・一〇・三一 受理)